

私本太平記

卷十

吉川

若川

美流

私本

太平記

卷下

風花帖



帖花風 卷十 記本私

〔著者との申し合わせにより
検印を省略します〕

昭和三十六年七月三十日 初版	著者	発行者	印刷所	製本所	発行所
定価 二百六十円	吉川 英治	高木 金之助	凸版印刷株式会社	大口製本所	毎日新聞社
					東京都千代田区有楽町一の一 大阪市北区堂島上二の三六 門司市清瀬町一の九〇二 名古屋市中村区堀内町四の一

目 次

野分のわけのあと 三

東景色あやまげしき 三五

義貞・駁ばくす 吾

網引き地藏 七〇

門 齒

風花かざばな 二三

内裏炎上 一四

小公子 一五

第五列 一七

魚見堂 うねみどう 一九

筑紫びらき つくし 三〇

勾当の内侍 こうとう ないし 三三

路頭の子 三三

豆と豆がら 三九

私本太平記

卷十

風
花
帖

每日新聞朝刊連載

昭和三五・九・七—三五・一二・二五

野分わかれのあと

敗者の当然ながら、直義ただよみの三河落ちはみじめであつた。

淵辺伊賀守の斬り死になどもかえりみてはいられず——敵に追われどおしで、とくに手越河原では残りすくない将士をさらにたくさん失い、今川・名児耶なごや・細川・斯波など一族子弟の討死も幾人かしれなかつた。

ついに、こゝでは直義も進退きわまつたとみてか、

『腹掻き切つて、左兵衛ノ督さひやうゑんのかく（兄尊氏）どのへお詫びせん』

といったのを、

『何の、こゝはお討死にのつばにあらず。いかなる恥をしのんでも、生きてこそ』

と、今川のりくに範圍のいさめに思いとまつて、苦闘に苦闘をつづけ、やっと川を渡りえたつたえら

れている。だがこの段はさて、どんなものだろうか。

直義の性格として、めったに斬り死にだの自害だのとは言いだしはしまい。もし事実なら、おそらくまわりの将士にさいごの決意を奮わすための指揮者の血相をみせたまでのものではなかったか。

なぜなれば、彼には、彼の身ひとつ以上な重任が考えられていたはずである。——鎌倉から救出して連れていた成良親王・みだい所の登子・またとくに若御料（尊氏の一子・千寿王）らの足弱をおいて——そうした短気はおこしえないところであった。

また、べつに淵辺をやつて、このどさくさ紛れに、大塔ノ宮を暗殺せしめたなどの、直義がとった処置をみても、惨敗の中でこそあれ、彼はなかなか狼狽などはしていない。次の段階——将来というものにたいして、兄の尊氏以上にも、

『こゝは』

と、はや今日の鎌倉放抛を、大望第二期への峠として、独断、思いきった手段に出ていた事とわかる。

そして要するに、彼の胸にあったのは、長いあいだのもどかしさを、宮弑逆の一事にかなぐり捨て、つねに政治的に、またつねにじれったい、兄の態度をして、いやおうなしに明確な反朝廷

へとこゝで引きずりこんでしまおうとする彼一流の強引な腹だったにちがいない。

とまれ、手越河原の難はからくも脱しえたが、矢矧^{やが}までまだ四十里ほどはあった。——が幸にも、ところの地頭、入江ノ左衛門春倫^{はつとね}の一隊が味方にはせ加わり、どうやら月の末、三河国の矢矧^{やが}についた。

こゝは郷党の地だ。即、足利方の勢力範囲といつていい。直義は、みだい所の登子の身をひとまず一色村へあずけ、また成良親王は、そのまゝ兵をそえて都へお送りし奉った。そしてひたすら兄尊氏の下向を待ちつゝ、また一面、奪回された鎌倉を、さらに再度奪回するの策やら準備におこたりなかった。

一方、都の空では。

つとに敗軍の報がひっきりなしに朝廷へも六波羅へもはいっていた。

まだ、直義の鎌倉放抛とまでは聞えないうちからである。尊氏は、

『あぶないもの』

と、はやくも形勢を察し、みずから赴^いつて、直義を扶けたい旨を、再三、朝廷へ奏請していた。しかるに朝廷では、これにたいして、断じておゆるしを降^{くだ}さなかった。

もっとも、尊氏が朝廷へ願ひ出ていたのは、たゞたんに、

「こと火急。鎌倉は無勢。みずから馳せくだって弟直義をたすけねば」というだけのものではなかった。

同時に、このさい、

征夷大將軍總追捕使

の印綬を自分にたまわりたいと、あわせて、請うていたのである。だが、

「もつてのほかかな！」

とする廷臣の強硬な反論のあらうことぐらい、彼が想見していないはずもない。知りつゝ、持ちだした奏請なのだ。尊氏も引くいろではなかった。

つまるところ、窮極は天皇の御採否一つにかゝる。おそらく叡慮をなやまされたことであらう。

征夷大將軍

は武家最上の任である。それを尊氏にゆるすのは、かつての鎌倉將軍家の格式を彼に与え、幕府再建をみとめることにほかならない。

一日々々、日はすぎた。

朝廷はゆるさず、六波羅はうごかず、たゞ車の、敗報ばかりが、矢つぎ早であつた。

するうちに、鎌倉の放抛、直義の敗走、つゞいて大塔ノ宮がその幽所で何者かに殺されたなど

の取り沙汰も聞えて、都じゅうは容易ならぬ風騒ふうそうの中におかれだした。

そうした八月一日。

朝廷は發表した。

鎌倉をのがれ出た成良親王をして「征夷大將軍トスル」という補任の令である。——これで尊氏もあきらめよう。そしてまた、尊氏の野望をも、これをもって塞ふさごうという窮余の封じ手だったのはいままでもない。

『殿は』

高たかノ師直はいま、どこからか、馬で六波羅へ飛んで帰って来たばかりである。

例の廂ひしノ間で、一ト汗拭いて、やがてのこと、薔薇園しょうばいの書院のうちに、ぬかずいていた。

『いや、その儀は、いしましたが、ほかの筋から耳に入っておるよ。かさねて、そちらから聞くにもおよばん』

尊氏は言った。いつもの尊氏とかわりもない。

いさ、か拍子抜けのかたちである。師直は、また出る顔の汗を懷紙でそっと叩きながら、それとは離れて、とっさに言った。

『いよいよ、お腹の決めどきでございますな。朝廷がわのご態度はさだまりまいたで』

『いまさら何を』

尊氏はうすら笑って。

『そちには、用が多いぞ。いつでも廂ノ間にひかえておるようにいたせ。かゝる折、執事のそちがどこへ行っておった』

『てまえならではなるまいかと存じ、佐女牛^{さめうし}まで一ト鞭^{むち}あてて行てまいりました』

『道答の許か』

『さようで』

『よく気がついた。気がかりはあの男のうごきにある。居たか』

『居りませぬ』

『参内か』

『でもございませぬ。はや佐女牛は無人同様で、昨夜、国元の伊吹へひきあげたと、留守の者が言いおりまいた』

『奴。さすがだな』

『そして、この一書を、足利殿へと、あとの家臣に託して行つたよしにござりまする』

文面を一読、尊氏は苦笑をみせ、それなりで黙っていた。

『殿』

と、師直は膝をすゝめ、

『道誉が何を書き残しておりますので』

『見るがよい。——このさい二心無し、と道誉がわざわざこれに証判しておる。そして、わしの東国出勢を、途中の伊吹にてお待ちせんとも書いておるのだ』

『はアて？』

師直はうめいた。誇張したあきれ顔をその下に作って。

『まだ、ご当家の出勢は布令でもいず、朝廷もまた例の、殿がお願いの件を、おきき入れはなく。……いやその奏請は蹴られて、征夷大將軍の任命は、成良親王へご決定と、公布がみられたばかりなのに』

『道誉は早耳だ。すでにその内定を、きのうのうち、知ったのだろう』

『それにしても、殿のご意中もようたゞさず、伊吹へ帰って、ご軍勢の通過を待つなどという先廻りは』

『よくいえば、機を見るに敏なやつ。悪くいえば抜け目ない横着者だ。が、よかれあしかれ、彼が二心無しといってきたのは、大きな幸せ。……さもないければ、尊氏はこゝで這奴にのど首をし

められねばならなかった。たとえどう膝を屈しても、道誉の機嫌をとって味方に迎えねば、うごきのつかぬ所であつたよ』

『ではやはり？』

『師直。きょう中にあらゆる準備をぬかりなくすましておけ』

『ご発足は』

『明朝、あかつき』

『そして、朝廷へは』

『そのまゝでよい。お届けにはおよばん。再三、お願い出ではしてあるのだ。……のんべんくらりと、御命ごめいの降下を待っていたら、東国の様相はそのあいだに一変してしまうだろう。さもあらば、とり返しはつかぬ』

真実、尊氏はいま刻々にそれが案じられていた。

天下の武士あらまは、公家政治に失望して王政ならぬべつな“何か”の形態を統一のうえに欲している。——北条残党ののろしが、東国の野でたちまち巨大な火勢となつたのも、現状に不平な枯れ草が土壌いたる所にあるからだ。

これは、尊氏として、坐視できない。武士の不平は、彼にすれば、彼のいだく大望の理想樓閣

をきずく良材なのだ、味方なのだ。その素地を、北条再建軍にうばわれては、彼の立脚する所はなくなる。

かつて、朝廷としても、こゝまできた北条討滅の意義は霧消してしまふ。——だからたとえ朝命をまたず無断東征に赴いても、それは天下の御為とも言えるのではなからうか。

尊氏は、しいて自分の行為に、そう理由づける。

直義とちがい、彼には暴を暴と知ってはできない思慮があった。朝廷度外などの不逞は敢てなしえないのだ。あくまで彼のなかには朝廷への崇敬があり、上への越権は気にかゝるらしい。

にもかゝわらず、彼は師直へ、無断離京の準備を命じた。

ひとつには、望んでいた征夷大將軍の補任が外された業腹もあったが、なによりは弟直義を見殺しにはできないとする情があった。分別顔に似ず、情には奔るほうなのである。

明けて、八月二日は、空もようまでが、たゞならなかった。颱風期である。どこか遠国で大荒れをしているのだらう。近畿いったいは強風だった。都の朝も雲脚の迅い明滅をしきりにして、加茂川の戦ぎがそのまゝ、大内裏の木々をも轟々とゆすっていた。

『あれ、御簾が』